

Title	『平治物語』における常葉：母子救済の様相をめぐって
Author(s)	カナパット, ルーンピロム
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 86-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70911">https://hdl.handle.net/11094/70911</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『平治物語』における常葉

— 母子救済の様相をめぐる —

## 一、先行研究と問題の所在

常葉は、平治の乱で夫源義朝が敗死した後、平家による源氏残党の探索から逃れるために、三人の子供を連れて雪の中を逃亡し、険しい道を歩む。又、彼女の母が平家方に捕えられたことや、子の命を犠牲にして母を助けようと決断することにより、苦悩を抱え込んだ女性として描かれている。こうした常葉の苦悩は『平治物語』のいずれの諸本にも描かれているが、細部を見てゆくと、相違点が見られる。

『平治物語』諸本における常葉譚の違い<sup>(1)</sup>については、多く論じられているが、飯塚紀久子氏<sup>(2)</sup>の論考によると、古態本である学習院大学図書館蔵本（以下、「学習院本」）は常葉の心情および母子の悲劇を主に描き出すのに対し、後出本である金刀比羅本は哀れな一人の女性常葉の悲しみを描き出しつつ、横暴な権力者としての清盛を性格づけようとする<sup>(3)</sup>ことが指摘されている。又、観音利

生との結びつきについて、両本とも観音利生を子供の助命の背景として常葉譚の末尾に描いているが、学習院本のみに見られる、老婆に救われる場面における観音利生の賛美に着目すると、学習院本は他の諸本と比べて清水観音の信仰に関わる説話の要素を多分に含んでいる<sup>(3)</sup>。

以上の先行研究から、学習院本は常葉と子供の悲哀と観音利生の語りを重視していると言える。では、学習院本は母子の悲哀と観音救済をどのように表現し、両者を結びつけているのであるのか。多くの論考が着目する描写は次のような場面である。

(イ)（常葉・執筆者注）子共が事は何とも成候へ、母の苦を助候はんとて、子共あひぐして参りてこそ候へ」と申ければ、御所を始まいらせて、ありとあるほどの女房達、皆、涙をぞながしける。世の常の女房の心ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世をこそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとり

ルーンピロム・カナパット

助んと申心ざしの有難さよ。仏神、定て御憐あらんずらむ

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二二五六頁〕  
（口）子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へと申さんを、なか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれて、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしなわせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二二五八頁〕  
多くの先行研究が注目するのは、（イ）のように、幼い子を失っても老いた母を助けようとする常葉の行動が、二重傍線部「世の常の女房」と対比される場面、あるいは、（ロ）二重傍線部のように常葉が親の情を語る場面である。

この二つの場面を通じて、たとえば、山下宏明氏は「常盤も幼児をかかえる親としてこの母の思いを知ったからこそへよのつね」を越えて自首して出たのである」と述べ、自首を決意した常葉の動機を解釈している。

このように、先行研究は世の常の女性、親の情という他の登場人物の行動に触れ、常葉の行動を解釈している。しかしながら、他の登場人物と常葉の行動を対比する描き方は、前掲の場面のみならず、他の場面にも見受けられ、学習院本常葉譚の特徴と言える。とりわけ学習院本は、母子の悲劇および常葉の心情描写が観音による救済へと展開していく過程において、対比の表現という方法を繰り返し用いている。

以上のような問題意識から、本稿では、学習院本と金刀比羅本における常葉譚の比較を通じて、学習院本における母子の悲哀とその救済の描かれ方を具体的に検討する。特に、学習院本が常葉の悲哀と観音救済とを結びつける際に対比の表現を利用することに注目して、学習院本常葉譚における独自性を明らかにすることを目指す。

夫の死後における常葉の叙述は以下のようにまとめられる。

#### 《都落ちの場面》

- ① 常葉は平家の戦後処理により自らの子も処分されるという噂を聞き、子供を連れて都を逃れようと決心する。
- ② 清水寺に参籠し、子の助命を祈願して、清水観音の利生に対する篤い信仰を語る。地の文には、その深い信心により、観音が母子の苦悩を哀れみ、救済してくれるだろうと記されている。
- ③ 逃避行の道中で困難な旅をする。
- ④ 老婆は、子供を連れて雪の中を彷徨い、悲嘆に暮れる常葉を哀れむ。そのため、彼女たちに宿を貸して様々に労わる。
- ⑤ 老婆に救われたことを観音の利生として認識し、観音の利生を賛美する。
- ⑥ 道中、人々に助けられ、大和に無事に到着する。
- ⑦ 母が捕えられたことを聞いた常葉は京に戻り、子を犠牲にして母を助けようと決心する。

⑧ 周囲の人々は、常葉が子を犠牲にしてまでも母を助けようとすることに感心し、神仏も彼女と子供の悲哀に同情するだろ  
うと述べている。

⑨ 六波羅に出頭する場面、死罪を覚悟した常葉は自分を子供より先に斬るようにと清盛に懇願するのに対し、子供はよく命乞いをするようにと母に言う。

⑩ 清盛は常葉と子の言動に心打たれ、処刑の決定を引き延ばす。

⑪ 常葉は処刑の延引を観音の利生として受け取り、観音の利生を賛美する。

⑫ 常葉の子供は罪を免れる。

具体的には、観音による救済への展開と深く関わっている、②清水寺参詣の場面、④⑤老婆に救われる場面と、⑧子供を犠牲にして母を助けようとする場面、⑨⑩清盛と対面する場面を分析の対象として取り上げ、母子の悲哀の語りと観音救済との結びつきにおける対比の表現に着目する。

## 二、母子の悲哀の語り

義朝の死後、子義平が斬られ、三男頼朝が生捕りにされる。常葉は彼女の子も処分されるだろうという噂を聞いた際に、三人の子を連れて都落ちをしようとした決心する。常葉と子供は雪の中を逃げ、険しい道を歩む。日が暮れ、宿を探していた時に、老婆に出会って救われる。夜が更けて常葉は次のように心中を子供に吐露する。

夜ふけ、人定てのち、母、八子が耳にさ、やきて云やう「あな、むさんの者共がありさまや。世にある人は、十八廿人、子をぞだつる人もあるぞかし。後先事は、うき世の習といひながら、同じたけ諸白髪になり、後は二親の跡をとふためしもあるぞかし。をのれらを三人もちたるが、せめてはひとりそひはてよかし。あすはいかなる者の手にかゝりて、何たる目にかあはんずらん。水にや沈められんずらむ、土にや埋まればんずらん。母とてわれををたのまん事も、子とて汝等を育ん事も、明るをまつ間の名残ぞかし」と、なくなく、かき口説ければ

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四六頁〕  
傍線部のように、「世にある人」は十人、二十人の子を育てる、後れ先立つことは「うき世の習」でありながら、兄弟とも白髪になるまで生き長らえ、両親の後世を弔うという例を語る。それに続いて、二重傍線部、三人の子供のうち、せめて一人でも最後までそばに居てほしいと懇願して、自らの絶望感を吐露する。又、子供たちはどのように処刑されるだろうと言って不安感を抱いている姿が描かれている。

周知のとおり、軍記物語における、後れ先立つことはこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、女性が戦乱で愛する者との離別を覚悟する、それによる悲哀を周囲に慰めてもらう場面によく用いられている<sup>5)</sup>。しかし、常葉の場合は、彼女の絶望感・不安感がそれに続いて描写されているように、子供に先立たれることに対する覚悟を示すというより、「世にある人」のよう

に子供が皆生き長らえることは期待できない、子供の命に関する苦悩を強調するために利用されている。その意味で、学習院本は「世にある人」、あるいは、「うき世の習」との対比表現を使用し、母としての常葉の悲哀を描写しているとと言えるだろう。

一方、金刀比羅本は常葉の述懐を次のように描いている。

二人のをさなき人を左右にをき、一人ふところにいだきてくどきけるは、「あはれ、いとけなきありさまかな。母なれば、われこそ助けんとおもへども、敵とり出しなば、情をやをくべき。少もおとなしければ、今若殿はきるか、乙若殿をばさしころすか、無下にをさなければ、牛若殿をば水にいるるか、土にうづむか、その時われいかにせむ。」と夜もすがらなき悲みけり。(金刀比羅本 下「常葉落ちらるる事」二八三頁)

金刀比羅本は世の習いに言及せず、傍線部のように、母として子供を助けたいと思いつつも、敵に捕らえられたら、殺されるだろうと不安感を吐露する常葉の姿のみ描いている。

こうして見ると、学習院本は不安感を抱く常葉の心境を描くと同時に、「うき世の習」との対比表現を使用して、他人と異なる母としての悲哀の深さを打ち出そうとしていることが見出される。前掲の引用文に見られるように、都落ちの場面において、常葉は子供の命を助けてもらいたいという思いを語るが、六波羅出頭の場面においては、拷問された母を助けるために、子供を犠牲にしようと決心する。

常葉、大和にて、此事聞伝えて、「わが子を思ふやうにこそ、

母もわれをばかなしむらめ。我ゆへ苦をうくと聞ながら、いかでか出て助けざるべき。前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし。其故もなきわが母の憂き目を見る事は、さながらわが身のところがぞかし。此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しむともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思て、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二五五頁〕

常葉は子供への自らの思いを、彼女のことを思い悩む母の気持ちと照らし合わせて、母を助けようと決心する。又、傍線部のように、子供が殺されることを、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めている。

子供の助命を求めている常葉の姿は、清盛と対面する場面においても語られている。

〔左馬頭、罪ふかき身にて、其子共、皆うしなはれんを、一人をも助させ給へと申さばこそ、其理しらぬ身にも候はめ。子共、かくもならざらんさきに、まづ此身をうしなはせ給へと申さんを、なか聞しめされでは候べき。高きも卑も、親の子をおもふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子共にわかれて、片時もたえて有べき身共覚え候はず。わらはをうしなわせ給ひて後にこそ、子共をば御はからひ候はめ。此心ざしを申さんためにこそ、左馬頭が草の陰に恥を見せて、かゝる憂形勢を思ひもしらず、これまで参て候へ。(後略)〕と、な

くくくどき申せば、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二二五八頁〕  
傍線部のように、常葉は清盛と対面した際にも、夫の罪を覚悟し、子供の助命を期待していないと繰り返し訴える。ここで注目すべきは、子供の処刑に対する覚悟に続く、母としての常葉の思いの描写である。常葉は子供が殺される前に、自分を先に斬るようにと清盛に懇願する。それに続いて、二重傍線部のように、身分の上下を問わず、おしなべて皆、子供のことを思い悩むという親の情を語り、子供を失うことによる悲嘆を吐露する。このように、学習院本は子供の処刑に対する覚悟を語り、それに続いて、親の情を通じて、子供に対する愛情を描写したことによって、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤が見出される。一方、金刀比羅本は常葉が母を助けようと決心する際に、前世の果報、あるいは夫の罪に対する覚悟を描かず、郭巨の故事を、母の命を助けるきっかけとして語っている。

大和にて常葉此由つたへき、「昔の郭巨は、母の命をたすけん為に、子どもをうづむとて穴をほりしかば、金の釜をほりいだし、母も子どもをも助るとぞうけ給はる。命あらば母をみるべし。少き子どもにはいかでか思ひかへ候べき。」とて、おさなき人々を引具して六波羅へいでけるが、(後略)。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二二八四・二二八五頁〕  
傍線部のように、貧しい郭巨は母の命を助けるために、子供を埋めて殺そうとしたが、穴を掘ったところ、金の釜を見つけ、母

も子供も助かったという故事が引用されている。

常葉に対面して、「この間いづくにありけるぞ。」と宣へば、常葉、「義朝の少ひ人々の候を、取いだされうしなはるべしと承り、かたはらにしのびて候つれども、とがもなき母の命を失なはるべしとうけ給候程に、たすけむ為に参りて候。をさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ。」とてなきるたり。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二二八五・二二八六頁〕  
清盛と対面する場面においても、夫の罪に対する覚悟や親の情に言及せず、傍線部「をさなきものどもうしなひ給はゞ、まづわらはうしなはせ給へ」という常葉の願いのみ描いている。

以上のように、両本とも母の命を助けたという常葉の思いと、自分を子供より先に殺してほしいという願いを語っている。しかしながら、子供が殺されることに関する常葉の心情描写には相違点が見られる。学習院本は一般的な親の情との対比表現を通じて、子供の処刑に対する覚悟と子供に対する愛情との葛藤を示しているのに対し、金刀比羅本はそのような揺れ動いた心情に着目せず、子供を失うことによる悲哀のみ描き出している。

常葉の心情描写の他に、子供の描かれ方にも両本の違いが見受けられる。

六子、母の顔をたのもしげに見あげて、「なかで、よくくくく申てたべや」と云ければ、只今までも、よに心強気におはしける大式殿(執筆注・清盛)も、「けなげなる子が詞かな」



とて、傍にうち向て、累に涙をながされけり。兵ども、あまた並居たりけるに、泪にむせびてうつぶさまになり、面を上たる者もなし。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二五八頁〕  
常葉の言葉に続いて、次男六子は傍線部のように、泣かずによく命乞いをするようにと母に言っている。常葉と子供の言葉に対し、二重傍線部のように、心強い清盛でも六子の健気さに感心し涙を流す。「けなげなる子」と清盛が褒めたことについて、日下力氏と飯塚氏の論考では、しっかりとした態度ではなく、状況を飲み込めていない六歳の子の無邪気さを暗示していると指摘されている<sup>(6)</sup>。

今若殿、敵清盛のかたへ一目、常葉が方を一めみて、「泣て物を申せばせひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と宣へは、平家の人々侍共、「義朝の子なれば、少けれども申つることのおそろしさよ。」とてしたをふりておちあへり。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八六頁〕  
一方、金刀比羅本では、次男ではなく長男が「泣て物を申せばせひも聞えぬに、なかで申させ給はで。」と母を叱つたとなっている。傍線部のように、周囲の人々は学習院本のように、同情するのではなく、その言動を恐ろしがっている。

以上のように、学習院本は一般的な親の情との対比表現を利用して、子供が処刑されることを恐れる常葉の心情を詳細に描いている。又、子供の無邪気さを、清盛、周囲の人々の同情を掻き立

てるものとして設定している。学習院本はこのように常葉の心の葛藤、子供の無邪気さを描いたことよって、子供を失うことによる母の悲哀のみならず、敗将の妻子の悲劇も浮かび上がらせるのである。

### 三、観音救済との結びつき

以上見てきたように、学習院本は「うき世の習」や「親の子をおもふ心」のような表現を利用して、他人より深い悲しみを抱え込む母子の姿を描き出し、悲劇性をいっそう増している。では、母子の悲哀を観音利生とどのように結びつけて救済へと展開していくのだろうか。ここで、清水観音に祈願する場面、老婆に救われる場面、母を助けようと決心する場面という三つの場面に着目する。

#### 《清水観音に祈願する場面》

常葉は子供を連れて都落ちをする前に、清水寺に通夜して次のように祈願する。

九のとしより月詣を始めて、十五に成しかば十八日毎に観音經三十三卷よみ奉る事、おこたらず。歩をはこぶ志の浅からざれば、本尊もいかでかはれと照させ給はざるべき。「大慈悲の本誓には、定業の者をも助け、朽たる草木も花ささき、実なるとこそ承れ。南無千手千眼観世音菩薩、三人の子共たすけまします」と、終夜、泣くとき祈り申せば、観音もいかに

に憐給ふらんとぞ覚えし。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四〇・二四一頁〕  
右のように、常葉は観音の慈悲と子供の無事への祈願を語っている。祈願の冒頭に「九のとしより月詣を始めて、十五に成しかば十八日毎に観音経三十三巻よみ奉る事、おこたらず」とあるように、日ごろからの深い信仰が示されている。さらに、波線部に見られるように、観音は母子の苦悩を哀れみ、救済してくれるのだらうと、作者によつて予告されている。

金刀比羅本においても、観音に帰依する常葉の姿は次のように詳しく描かれている。

佛の御前にて申けるは、「わらはは、観音にたのみをかけまいらせ、七歳のとしより月まうでおこたらず。十三のとしより月ごとに一部の法華経をこたらず、十九の歳より月ごとに十三礼の聖容をすりたてまつる。その観音の慈悲利生ふかくおはしますことをうけたまはるに、三十三身の春の花、にはふたもとは数をしらず、十九数の秋の月、もりこぬ宿はよもあらず。観音の慈悲利生なれば、後世までと申とも、何にかなへさせたまはざるべき。いかにいはんや、今生に三人の子共の命を助てわらはにみせさせ給へ。」と通夜くとき申されければ、観音もいかにあはれとおほしめしけむ、夜もあければ、参籠の上下みな下向す。

〔金刀比羅本 下「常葉落ちらるる事」二八〇頁〕  
右のように、常葉の長年の観音信仰、観音の慈悲、子供の助命

への祈願が語られている。さらに、観音によつて母子が救済されることも波線部のように予告されている。

ここで注目したいのは、学習院本が常葉の祈願の前に、彼女と同様に通夜して祈る周囲の人達の姿に言及していることである。

其夜は、観音の御前に通夜す。二人を左右のかたはらに伏せて、おさなきをふところに抱きて、夜もすがら泣かせじとこしらへける、心の中いふはかりなし。所々の参詣の貴賤、肩をならべ、膝をかさねて並居たり。祈誓の趣、まち／＼なり。或は、ありはてぬ世中なれ共、過がたき身のありさまをいのるもあり。或は、世につかへながら、司位の心にかなはぬ事をいのるもあり。されども常葉は、「三人の子共が命、たすけさせ給へ」と、いのるより外、又心にかけて申事なし。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四〇頁〕  
傍線部のように、周囲の人たちは平穏な生活や繁栄を祈願している。それに対し、常葉は他人の願いと異なつて、二重傍線部、子供の無事を祈るより他はないとあるように、子供に関する常葉の深い苦悩が表現されている。金刀比羅本は前掲のように、常葉の信仰と祈願を中心に描写しており、母子の悲哀を特に描いていない。

以上のように、両本も清水寺参詣の場面で、常葉の観音信仰を明示し、母子が観音利生により救われることを予告している。よつて、両本においても常葉の長年の深い信仰は、救済をもたらす要因として重視されていることが窺える。ところが、学習院本



は金刀比羅本に見られない、俗事を祈る周囲の人たちの願いを先に挙げ、子供の命を考へることしかできない常葉と対比して、敗將の妻子の憂き身を浮彫りにしている。このように、学習院本は積極的に対比表現を利用しただけに、清水寺参詣の場面において、常葉の深い信仰の他に、悲哀に満ちた心境も打ち出され、母子の苦悩は観音救済と結びつけられることがより明確に見出される。

#### 《老婆に救われる場面》

都落ちの場面において、険しい道を経た常葉は老婆に出会って救われる。彼女は老婆に出会った際に、事実を言わずに夫の薄情を恨んで逃げ出したと嘘をつく。常葉の隠しごとを見抜いた老婆は次のように言っている。

さればこそあやしかりつるが、いかさまにも、たゞ人にてはおはしませじ。かゝる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。行衛もしらぬ君の御ゆへに、老衰たる下臈が六波羅へ召出されて、繩をもつき恥をもみて、命をうしなふほどの目にあふとても、追出し奉るべきかは。此里のならひ、誰かうけ取まいらせん。野山にこそおはしまさんすらめ。是ほどさむく絶がたきに、明日までも、いかでかながらへさせ給べき。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四五頁〕

老婆は、傍線部のように、常葉と子供のようなこの先どうなるか分からない人を匿つたために、自分が平家方に捕えられ、命を

失うほどの目に遭うだろうと自覚しているものの、常葉と子供を助けようと決意している。

ここで注目すべきは、老婆が常葉と子供を救う際に、二重傍線部「此里のならひ」に言及していることである。日下氏は「此里のならひ」を、「都近く損得にさといこの里のこと、世話する人などおりません」と解釈している<sup>(7)</sup>。日下氏の解釈を踏まえると、学習院本は老婆が自らの命の危険を覚悟したものの常葉と子供を助けることを、「此里のならひ」と異なる行動と示し、老婆の温情を強調しようとするのが窺われる。

それに対し、金刀比羅本は彼らを困難な旅から救つた人の言動を次のように描いている。

ある小屋に立よりて、「宿申さむ。」といへば、主のおとこ出てみて、「たゞいま夜深で少人を引具してまよひ給ふは、謀叛の人の妻子にてそましますらん。かなふまし。」とておとこうちへ入にけり。落涙もふる雪も、さうのたもとに所せく、柴のあみ戸にかほをあて、しほりかねてぞ立たりける。主の女房出てみていひけるは、「われらかひん、しき身ならねば、謀叛の人に同意したりとて、とがめなんどはよもあらじ。たかきもいやしきも女はひとつ身なり。いらせ給へ。」とて、常葉をうちへ入て、さま／＼にもてなしければ、人ご、ちになりにけり。

〔金刀比羅本 下「常葉落ちらるる事」二八二・二八三頁〕

金刀比羅本は学習院本のように「此里のならひ」に言及せず、

常葉の姿を見た主の男が「謀叛の人の妻子にてそましますらん」を理由にして常葉の依頼を断る姿を描いている。又、主の女房が宿に泊める際に、傍線部のように身分や女の身という理由のみ挙げてゐる。

学習院本は金刀比羅本に見られない「此里のならひ」との対比表現を通じて、老婆の温情を詳細に描写し、さらに、老婆の言動を次のように観音の利生と結びつけている。

（老婆・執筆者注）いそぎよび入、あたらしき筵取出してし  
かせ、たき火してあて、饗応してぞす、めける。常葉は、胸  
ふさがりてすこしも見ず。子共をば、とかくすかして食わせ  
けり。常葉が物くはぬを、あるじ心苦く思ひ、色／＼のくだ  
もの取出して、「是はいかに、あれはや」とす、むれば、直  
事とも覚えず、偏に清水の観音の御あはれみなりと、行末も  
たのもしくぞ思ひける。

〔学習院本 中「常葉落ちらるる事」二四五・二四六頁〕  
老婆は常葉と子供を宿に泊めて様々に労わる。波線部のように、  
常葉は老婆の行為を「清水の観音の御あはれ」として受け取って  
ゐる。

こうして見ると、学習院本は対比の表現を通じて、老婆が自ら  
の命を顧みず母子を救ったことを「此里のならひ」と異なる行動  
と示し、老婆の温情の深さを強調した上で、観音利生と結びつけ  
ようとしている。

《母を助けようと決心する場面》

常葉は困難な旅を経て、一旦、大和に隠れる。しかし、その後、  
母が拷問されたことを聞き、母を助けるために六波羅に出頭しよ  
うと決心する。ここで、子供を犠牲にしようとして決心する際の述懐  
に注目したい。常葉は「前世の果報拙て、義朝が子と生れ、父が  
科の子に懸てうしなはれん事は、其理、有ぬべし」と言つて、子  
供の処刑を、前世の果報や夫の罪の結果として受け止めてゐる。  
それに続いて、

此後も子ほしくは、同じゆかりの子を養ても慰ぬべし。無量  
劫をへてもあらざる親子の中也。責殺されてのちは、悔しむ  
ともかひあらじ。母、此世にある時、出て助けん」と思つて、

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二五五頁〕  
とあるよう、子供がほしければ、亡き夫の血縁につながる子を養  
うことができるが、母を殺されたならば、悔しいと思つても甲斐  
がないと思ひ、母を助けようと決心する。

子供の命と引き換えに母の助命をしたいという思ひは、六波羅  
に出頭する前に、常葉が昔仕えていた九条院藤原呈子（以下、  
「九条女院」と、清盛の側近伊勢守景綱と対面する際にも語られ  
ている。ここで注目すべきは常葉の思ひを聞いた九条女院、女房  
達、および景綱の反応である。

九条女院と対面する場面において、常葉は「子共が事は何とも  
成候へ、母の苦を助候はん」とあるように、子供を犠牲にして母  
を助けようとするという思ひを語る。

〔世の常の女房の心〕ならば、「老たる母は今日ともしらぬ命なり。後の世をこそとぶらはめ。行末とをき子共をたすけん」と思ふべきに、子を皆うしなふ共、母ひとりを助んと申心ざしの有難さよ。仏神くわん定て御憐あはれあらんずらむ。(後略)とめんく申されければ、

〔学習院本 下〕「常葉六波羅に参る事」二五六頁）それに対し、女房たちは傍線部「世の常の女性ならば、老いた母は今日でも生き長らえるかどうか知らないので、母が亡くなったら後世を弔えばいい、将来がある子供の命こそ助けようと思うものだ」という世の常の女性の考え方に言及している。そして、世の常の女性と違って、幼い子を失つても老いた母を助けようとする彼女の親孝行を称賛して、波線部「仏神、定て御憐あらんずらむ」と述べている。このような女房の言葉について、山下宏明氏と小番達氏は常葉の親孝行が神仏による救済に繋がったと解釈している。

〔常葉・執筆者注〕子共こそうしなひ候はめ、母をばいかでか助けでは候べきと思ひ定めて、御尋ある子ども、相具して参て候うへは、母をばゆるさせ給へ」と泣き申ければ、きく人、孝行の心ざしを感じて、みなく涙をぞながしける。

〔学習院本 下〕「常葉六波羅に参る事」二五七頁）景綱と対面する場面においても、景綱らは傍線部、常葉の「孝行の心ざし」に感心することが描かれている。

このように、子供を犠牲にしてまでも、親孝行を果たそうとす

る常葉の思いは、世の常の女性の行動と異なり、周囲の人たちの心を動かすものとされている。又、母子が神仏の慈悲により救われるだろうという予告が、この場面と前掲、常葉が子供の無事を祈願する場面とに描かれていることから見ると、山下・小番両氏が指摘するように、学習院本では母子の苦悩の他に、常葉の親孝行も神仏の救済をもたらす一因と見做される。

女房たちが言及した、老いた親より子供を助けるといふ世の常の女性の考え方は『今昔物語集』巻十九、第二七「住河辺僧、値洪水棄子助母語」にも見受けられる。

淀川の辺に住む僧は氾濫により子供を流される。僧は子供を助けて岸に戻ろうとする際に、目の前で老いた母が流されていく。僧は子供と母を同時に助けることはできず、「命有ラバ子ヲバ亦モ儲テム。母ニハ只今別レテハ亦可値キ様無シ」と思い、子供の手を離して母を助ける。僧の妻は子供が流されていったことを歎き、「汝ハ奇異キ態シツル者カナ。目ハ二ツ有り。只独リ有テ白玉ト思ツル我ガ子ヲ殺シテ、朽木ノ様ナル姫ノ今日明日可死ラバ何ニ思ヒテ取り上ゲツルゾ」と夫を責める。最終的に、「母ヲ助タル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲ末二人取り上ゲタリケレバ」とあるように、子供が助けられたのは仏が僧の親孝行を感じたからだと言つて話を締め括っている。

最愛の一人子を捨て、今日明日、死ぬだろう、「朽木ノ様ナル」老いた母を助けた僧を、「奇異キ態シツル者」と責めた妻の言葉から、いざという時に、老いた母より子供を助けることは常識的

な行動だと考えられる。さらに、妻の悲しみを慰めようとする僧は「現ニ云フ事理ナレドモ、明日死ナムズト云トモ、何デカ母ヲバ子ニハ替ヘム。命有ラバ子ハ亦モ儲テム。」と言っている箇所にも見られるように、子供はまた儲けられるが母の代わりはないことを訴えながらも、妻が言った事を「理」と認めている。このことから、僧の考え方は世間での一般的な判断であることが確認できる。このように、僧は「世の常」の人々と異なる判断をする事が明示されているが、話の結末に「母ヲ助タル事ヲ仏哀トヤ思食ケム、其子ヲモ末二人取り上ゲタリケレバ」とあるように、親孝行を果そうとする僧の行為こそ子供に救済をもたらす要因となっている。

僧の話往常葉譚と合わせて見ると、子供を犠牲にしてまでも親孝行を果たすという彼らの行為を「世の常」の人々の判断と異なる特異なものとして示した上で、親孝行を救済と関連付けようとする物語の姿勢が窺われる。

一方、金刀比羅本においても親孝行を果たす常葉の姿が描かれているものの、九条女院の反応には相違がある。

おさなき人々を引具して六波羅へいできるが、九条の女院にいとま申にまいりたり。女院御覧じて、「何に、此ほどは何事ありつるぞ。」とおほせくだされければ、「子共の命助けん為に、大和なる所にしのびてさぶらひつれ共、とがもなき母のいのちを失なはるべしとうけ給て、助けん為に六波羅へいでさぶらふが、いとま申に参りてさぶらふ。」と申せば、女

院あはれにおほしめし、最後の出立自せんとて、

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二八四・二八五頁〕

右のように常葉の苦悩に同情する九条女院の姿が描き出されている。しかし、学習院本のように常葉の親孝行を「世の常の女房の心」と対比して称賛することと、観音救済の予告は記されていない。

このように両本における親孝行の叙述を比べると、学習院本は「世の常の女房の心」と対比させつつ常葉の「孝行の心ざし」を強く印象づけ、観音救済へつなげようとする事が明確になる。

以上見てきたように、学習院本は母子救済へと展開するにあたって、俗事を願う人たちの姿、「此里のならひ」、「世の常の女房の心」といった世間での一般的な行動を取り上げ、それと異なる、母子の苦悩の深刻さ、老婆の温情、常葉の親孝行を打ち出している。こうした対比表現で常葉の悲哀や性質を浮かび上がらせ、その上に救済を予告する形で母子救済へと展開していくことは、金刀比羅本にはなく、学習院本の特徴と見做すことができる。

最終的に、頼朝が死罪を免れ、流罪に処せられることが決まったことにより、常葉の子供は罪を赦されることとなった。常葉の子供が助命された場面において、次のように観音利生を賛美して章段を締め括っている。

常葉、「一日片時も命のあるこそふしきなれ。これさながら、清水の観音の御助なり」とたのもしくて、わが身は観音経をよみ、子共には観音の御名をおしへて唱へさせけり。

〔学習院本 下「常葉六波羅に参る事」二二六〇頁〕  
波線部のように、常葉は子供の処刑が延引されたことを「清水の観音の御助」と思い、自身が観音経を読んで子供に観音の名を唱えさせている。ここに、常葉は子供が生き長らえたことを、清水観音の利生と受け取っていることが明確に表されている。

多くの先行研究で指摘されたように、『平治物語』のいずれの諸本も、常葉譚の末尾で常葉と子供の助命を観音救済と結びつけている。ただし、金刀比羅本は観音利生の他に、常葉の美貌を助命の一因として設定している。

三人の子どもの命をたすけしは、清水寺の観音の御利生といふ。日本一の美人たりし故也。容は幸の花とはかやうのことをや申べき。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二二八七頁〕  
金刀比羅本においては、波線部のように観音利生は常葉の言葉ではなく、地の文として記されている。さらに、観音利生のみならず、常葉の美貌も二重傍線部のように助命の一因となる。常葉の美貌は次のように語られている。

常葉生年二十三、九条女院の後たちの御時、都の中よりみめよき女を千人そろへて、そのなかより百人、又百人が中より十人すぐりいだされける。其中にも常葉一とぞきこえける。千人が中の一なれば、さこそはうつくしかりけめ。異国に聞えし李夫人・楊貴妃、我朝には小野小町・和泉式部もこれにはすぎしとぞみえし。貴妃がすがたをみな人は、百の媚をな

すといへり。大宰大貳は、常葉が姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。

〔金刀比羅本 下「常葉六波羅に参る事」二二八六頁〕  
右のように、金刀比羅本は美しい女性千人の中から選ばれたという常葉の美貌を語っており、傍線部では清盛が常葉の美しさに惹かれることが描かれている。

学習院本では、常葉の美貌は助命の一因ではないが、金刀比羅本と同様に美貌の評判が描かれている。ここで注目すべきは、学習院本が常葉の美貌だけでなく、痩せ衰えた姿も描き出していることである。

常葉がとし、廿三なりき。中宮の官女にて物なれたるうへ、思ひ胸にあれば、こと葉、口に出て、たけき武士もあはれと思ばかりに申つゝけて、青黛、ふかき涙に乱れ、歎日数を経て、其人ともなくやせおとろへたれども、なを世のつねに越たり。見る人、これをあはれまらずといふ事なし。「これほどの美女をば、目にも見ず、耳にも聞およばず」と申あひければ、ある人、申けるは、「よきこそ、ことはりなれ。大宮左大臣伊通公の、中宮御所へ、見目よからん女をまいらせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より千人召れて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちのの一にて、此常葉をまいらせられたりしかば、わろかるべきやうなし。さればにや、見れどもく、めづらかなるかほはせなり。唐楊貴妃・漢李夫人が、一度咲ば百の媚をなしけんも、これには過じ」と、



たはぶれ申人もあり。

〔学習院本 下〕「常葉六波羅に参る事」二二五九頁）  
二重傍線部のように、常葉は「其人ともなく」瘦せ衰えたが、美しさが「なを世のつねに越たり」と評され、そのような彼女の有様を見た周囲の人々は同情・感動したとある。

もちろん、このような常葉の有様の描き方は単なる登場人物の美しさを描写する典型的な表現方法である。しかしながら、常葉の悲哀や親孝行の描写と同様に、同情心を引き起こすものとして機能していると考えられる。こうして見ると、両本とも観音救済を語るとはいえども、助命への展開には大きな相違点が見出される。学習院本は前の場面に呼応する、人々の同情心といった要素を軸とするのに対し、金刀比羅本は清盛が常葉の美貌に心を奪われたことを付加し、美貌を観音利生とともに助命の要因として位置付けることで、人々の同情心の要素が後退していくのである。

#### 四、おわりに

以上、学習院本と金刀比羅本との比較を通して、学習院本における母子の悲哀および観音救済の描き方を考察し、対比の表現に注目した。常葉譚の描かれ方について、今までの多くの先行研究では、『平治物語』諸本の本文異同により、母子の悲哀と観音救済を重視する学習院本の姿勢が指摘されてきたが、描き方の点から考慮すると、対比の表現は学習院本の常葉譚における一つの表現形式として、母子の受難から観音救済へと展開する過程と深く

関わっていることが窺われる。学習院本は金刀比羅本のように単に母子の苦難を語るのではなく、対比の表現を利用し、常葉の心境、他人とは異なる追い込まれた深刻な状況を詳細に描き出した上で、敗将の妻子の悲劇性を浮彫りにしている。又、母子の受難から観音救済へと展開する際にも、対比表現を通じて、老婆の温情、特に、常葉の親孝行を、世間での一般的な行動と異なる特異なものとして示した上で、観音救済につなげている。このように、学習院本が対比の表現方法を利用して、敗将の妻子の悲劇性や常葉の性質を、人と神の同情心を引き起こすものとして打ち出し、観音利生による母子救済という構想を提示することに、学習院本常葉譚の表現形式における独自性が見出されるだろう。

#### 注

- (1) 岡部真由美「『平治物語』における常盤像の生成」(『広島女学院大学 国語国文学誌』三一 一九七三年十二月)、長沢レイ子「『平治物語』における常葉説話の考察」(『千葉大学人文学部 語文論叢』三一 一九七五年五月)、小番達「平清盛と常葉」(『国文学 解釈と鑑賞』七一 二〇〇六年十二月)
- (2) 飯塚紀久子「『平治物語』における常葉説話の変遷」(『成蹊国文』十三 一九七九年十二月)
- (3) 物語全体を通じて、常葉譚に語られる観音利生は、源氏再興話、あるいは、源家後日譚の義経物語とどのようにつながっているかという問題点について、山下宏明「『平治物語』の読み―常盤の物語をめぐる―」(『文学』五二・四 一九八四年四月)は、「この観音が常盤母子の行く先を拓き、源氏の再興をつむぎ出し



て行くのである」と述べ、常葉譚に語られる観音利生と源氏再興話との関連性を指摘している。それに対し、安藤淑江「平治物語『源家後日譚』考―常葉譚の継承と頼朝報恩報復譚をめぐって―」〔軍中物語の生成と表現〕研究叢書 一九九五年）は、「源家後日譚」中の義経の物語には、靈験譚の側面は全く見られない。このことから、「源家後日譚」の義経の物語が、常葉の物語を継承しつつも異質なものであることがわかる。」と述べ、源氏再興話は常葉譚における観音利生の語りと直接関わっておらず、常葉譚の延長として語られると指摘している。本稿は、安藤氏の見解に基づいて、常葉譚における観音利生の語りを源氏再興話とは分けて考えることとする。

(4) 山下宏明(前掲注)(3)著書

(5) 後れ先立つことがこの世、あるいは、人の「習」であるといった表現は、登場人物が愛する者を亡くして悲嘆に浸る場面によく見受けられる。例えば、『保元物語』において、為義の北の方が夫、子供たちを斬首されたことを歎いて入水しようとする際に、周囲の人達は、

御歎事ハ中く申不レ及。昔モ今モ加様事ハ候。親ニ後レ子ニ後レ、妻、夫ニ別ル、事、人毎ノ習也。

〔保元物語〕下「為義ノ北ノ方身ヲ投ケ給フ事」一一四頁）  
と云つて、夫婦、親子がどちらかに先立たれることは「人毎ノ習」である、と彼女の悲哀を慰めている。

(6) 飯塚紀久子(前掲注)(2)著書と、日下力「常葉譚の撰取

〔平治物語の成立と展開〕汲古書院 一九九七年、初出一九八三年）は、清盛が六子を「けなげなる子」と褒めたことに、状況を飲み込めない六子の無邪気が暗示されていると指摘している。日下氏の論考によると、次のようになる。

常葉は、もとより、子供の命乞いをしているのではなかった。

それを「六子」は理解できていなかったのである。泣訴する彼女の姿に悲壮な強さがにじみ出ていたとしても、現実的には「たのもしげ」であるはずはなかった。母と子の間にあるギャップが、清盛をはじめとする武士達の涙をさそう。清盛は、「けなげなる子が詞かな」という言葉を洩らしたというが、それは、事態をのみこめぬままに口を差しはさむ、さかしらな子供のいじらしさに対して発せられたものであつたらう。

(7) 日下力「平治物語」(岩波書店 一九九二年)

(8) 山下宏明(前掲注)(3)著書は、「この〈よのつね〉を越えた親子の情、常盤の自首が清水観音を動かしたのである」と述べている。小番達「『平治物語』における常葉御前の女性性」(国文学 解釈と鑑賞 七十一 二〇〇五年三月)は、「母である自己を抑制して、あるいは犠牲にしての行為(孝養)であった点が観音の救済に繋がった」と指摘している。

使用テキスト

・新日本古典文学大系「保元物語・平治物語・承久記」(岩波書店 一九九二年)

・日本古典文学大系「保元物語・平治物語」(岩波書店 一九六一年)

・新日本古典文学大系「今昔物語集 四」(岩波書店 一九九四年)

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。